

説教「十字架の勝利」

(詩編 22 編 25-32 節、マルコによる福音書 10 章 32-45 節)

2022 年 4 月 3 日

日本基督教団仙川教会 主日礼拝

大串肇牧師

「一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。」 (マルコによる福音書 10 : 32)

イエスはいよいよエルサレムへ上ります。それは苦しみを受け、十字架に付いてわたしたちを救うためです。それは険しい道でした。また当時の人々が予想もしなかった出来事でした。本日お読みした最初のセクションは (32 - 34 節) は、イエスのご自身の運命、十字架と復活について予告している場面です。実はこれが三回目です。弟子たちはいかに反応したでしょうか。ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出てイエスが栄光をお受けになるとき、自分たちも名誉ある地位を与えてくれるように頼みました。確かにイエスは栄光をお受けになるのです。しかしその栄光は十字架という苦難と無関係ではありませんでした。そこでイエスはこう問いました。

「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか」と。

イエスは栄光を受けることを否定していません。また、弟子たちが栄光を受けることも否定していません。しかし、その栄光は十字架を通して与えられる栄光なのです。そしてその苦しみは彼らと無関係ではありません。十字架の苦難にあずかることを主イエスはここで二つの比喩で表現しています。「杯」と「洗礼」です。旧約聖書では「杯」とは神の怒りや刑罰を表す比喩としてしばしば用いられました。その杯を神の御子であるイエスは飲むとはどういうことなのか。イエスにとりましてそれは「苦い杯」です。あの有名なゲッセマネの園の祈りにはこういう祈りが出て来ます。マルコ福音書14章36節です。

「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

神の御子イエスですら苦しみを取り除いてください、と祈ったことにわたしたちは驚きとともに、深い感動を覚えます。罪を犯し、自分の欲望のままに生きているならば、いつか神の怒りにふれ、死んで滅びるのもいかに仕方ないでしょう。自分だけが偉くなりたいと願って裁かれるならば当然でしょう。しかしまったくイエスのような方が、神の怒りを身に負うのか。それは犠牲であり、身代わりであり、わたしたちの代わりに十字架にお付きになったのです。

「人の子(=主イエス・キリスト)は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人々の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」(マコ10:45)

「身代金」というのは、もともと経済用語です。ものには何でもコストがかかります。しかし人間を罪から解放するためには金銭ではなく、キリストの尊い命が必要なのです。また、「多くの人」とは多数と言う意味ではありません。すべての人たち、全人類のことです。つまり、どんな人でも、すべての人の罪を担い、イエスは身代わりの死を遂げられました。なぜでしょうか。わたしたちが「偉かった」ではありません。ふさわしかったのでもありません。罪深いわたしたちを神は見捨てなかった。それが愛です。この愛に出会うとき、人は愛の人に変えられる。大いなる奇跡が起こるのです。これこそ十字架の勝利ではないでしょうか。

ゼベタイの子らは後に初代教会の指導者になりました。そして弟子たちの中には殉教した者もいました。彼らもまた十字架の苦しみに与る証人となったのです(43-44節)。こうして多くの人々がイエスを信じるようになりました。

**偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、
いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。**

キリストの愛に出会った者の生き様です。神に仕え、他者に仕える生き方です。キリストを信じる時、わたしたちの人生は変わります。自己実現のためではなく、キリストがわたしたちを愛したように、わたしたちも神を愛し、他者のために生きるようになれる。「洗礼」や「信仰告白」は出発です。新しい人生への招きです。新しい年度にありまして、今こそこのキリストの愛に立ち返り、神に仕え、互いに仕えあう信仰の交わりへ成長することを心から願いつつ歩んでまいりたいと思います。ご一緒にお祈りいたしましょう。